

好個の著書である。

(池永正人)

藤塚吉浩著：『ジェントリフィケーション』古今書院，2017年3月刊，191p.，2,800円（税別）

ジェントリフィケーションは、1990年代以降におけるグローバル経済の成長に伴い、その形態を徐々に変化させ、鍵概念となった。本著者はまさしくこの時代に、ジェントリフィケーションに関する論文を数多く執筆したジェントリフィケーション研究の開拓者であり、その研究地域は京都、東京など日本国内に留まらず、イギリス、アメリカ、ドイツなど海外に及ぶ。

本書は10章と、その各章における事例報告を位置付ける「まえがき」から成る。第1章では、ジェントリフィケーション研究、すなわち、ジェントリフィケーションを鍵概念とする研究の世界的動向が紹介されている。まず第1章では、都市再生としての光の側面と、それと同時に発生する立ち退きやコミュニティへの影響に関する研究、第2章ではその発生要因に関する研究（資本化か人間か）第3章では多元化する現象の理論的統合が取り上げられ、第4章では21世紀に入り注目された同現象の学問分野における背景、および資本主義・先進諸国のみならず、旧社会主義国・発展国へと発生地域的にもグローバル化がみられることが書かれている。

第1章は、ジェントリフィケーションに関する海外諸国の研究動向と日本における研究の可能性という章題に表されるように、1960年代のロンドンで同用語が生み出された背景と、その後に関心部衰退に悩まされていた1970年代のアメリカにおいてジェントリフィケーションが歓待されたという時代的推移を記述し、社会的影響（都市へ

の回帰・再活性化・立ち退き）と理論的探求（制度論・段階モデル・地代格差論・新中間階級・マージナルジェントリファイアー）の側面から膨大な数の先行研究を端的かつ明解に紹介し、とりわけ今後は新中間階級に関する研究の重要性が増すことが示唆されている。

第2章では、京都市西陣地区を事例とし、京都市中心部への人口回帰と、その一因でもある中心部のオフィスビル建設に注目し、主に居住者の職業（専門・技術職就業者あるいは学生）、世帯構成（核家族世帯あるいは単身）、住宅所有関係（持家あるいは借家）、前住地域の傾向（市内他地区あるいは他県）に関する定量的データを地区別の国勢調査を用いて示している。また、複数年の住宅地図を用いて従前の土地利用を比較し、西陣織の事業所跡地とそこへの共同住宅の建設による立ち退き発生を示唆している。西陣地区の基幹産業であった繊維工業は、呉服の需要の陰りと出機による地区外生産の増加により1980年代に衰退した。この時期に地価の相対的安さ、歴史的地区としてのイメージの良さなどから共同住宅が建設され、これら共同住宅への専門・技術職就業者の増加が確認された。

第3章では、東アジア諸国におけるジェントリフィケーションの発生傾向として、伝統的住宅あるいは高層共同住宅であること、1980年代以降にはソウルオリンピック開催や外国人観光客の増加を背景に伝統保存への認識が高まり、伝統的住宅が再評価されたことである。この意味で京都市は、日本の主要都市において数少ない第二次世界大戦による被災の少なかった例として好事例と成り得るといえる。京都市のインナーシティは、バブル経済崩壊後の地価の下落と空閑地の存在を背景とし1990年代半ばにジェントリフィケーションを経験したという。

第4章は、2000年代以降のジェントリフィケー

ションの研究動向を、スコーパスを用いて提示している。ジェントリフィケーション研究の論文数は1990年代の景気後退時に減少したが、2000年代に入ってから急増したという。また、1990年代には地理学における論文数が他学問分野を凌駕していたのに対し、2000年代には都市学の学術雑誌への掲載論文数が地理学を上回るほどに増加した。こうした「21世紀」のジェントリフィケーションは主として新築のジェントリフィケーション、都市プロジェクト、新自由主義に関するものであるという。また、1970年代から研究者により多くの注目をうけていたロンドンにおいて、とりわけ2000年代以降には工場跡地や空地における新築のジェントリフィケーションが重要性を増したことが述べられている。

続く第5章では、第4章で紹介されたロンドンの中心を流れるテムズ川周辺の新築のジェントリフィケーションを、資本の再投資、高所得者の来住による地域の居住者階層の上方変動、景観の変化、低所得の周辺住民の間接的立ち退きから判断されるとの先行研究を踏襲したうえで、とりわけ地域の居住者階層の上方変動と景観の変化を統計と現地調査から、立ち退きに関しては先行研究により明らかにしている（なお、資本の再投資に関しては居住者変動および景観から判断可能としている）。

第6章では、舞台をニューヨーク州に移し、ニューヨークのジェントリフィケーションの歴史的推移を簡潔にまとめつつ、2000年代以降のブルックリン北部を対象に居住者の専門・管理関連職就業者率を示し、とりわけ割合が70%と高い地区（コミュニティ・ディストリクト）であるパーク・スロープ、ブルックリンハイツ、ダンボを紹介している。また、2000年代に最も変化の著しいウィリアムズバーグを取り上げ、ゾーニングの変更などに注目している。

第7章では再度日本の例に戻り、東京特別区部

における専門・技術、管理職就業者の変化を注視しつつ、潜在的地代と資本化地代との地代格差により高層の住宅開発が行われたこと、とりわけ東京都中央区では2002年の都市再生特別措置法施行により超高層共同住宅の建設が著しく増加したことを指摘している。

第8章では世界都市ニューヨーク、ロンドン、東京の都市間比較研究が行われている。なかでもこれら3地域における社会経済的变化、とりわけ職業階層の変化とエスニシティの人口変化の比較では前者をロンドン市タワーハムレッツのミルウォールと港3丁目、後者をニューヨーク市ブルックリンのサウスサイドで比較している。

第9章では社会主義後のベルリンのジェントリフィケーションを、とりわけ社会主義体制下の都市建設と、老朽化した建物への補助政策、賃料上昇に注目しフリードリヒスハイン地区における例を紹介している。

第10章では、2000年代以降の脱成長社会におけるジェントリフィケーションの特徴が、とりわけ都市政策との関連にあるとし、大阪市中心部における2000年代後半の社会構造の変化に注目しつつ、西区、谷町6丁目、天満福島区の産業構造の変容と建物の特徴を述べたのち、これら地区周辺のコミュニティがどのようにそれらと対峙しているか、景観との不調和なども述べている。

本書のまえがきにもある様に、ジェントリフィケーションは地価の変化と密接に関わるという点において、都市地理学の主要概念と大きく関わる。例えば、都市内部構造の変化、すなわちバージェスの同心円地帯モデル（本書では理論と解釈されている）やホイトの扇型モデルという都市地理学の主要概念の理解とも密接に関わる。その他にも本書では、都市活性化、人口回帰現象（Back to the City Movement）やインナーシティ問題、都市経済の衰退とバブル崩壊など、幅広いテーマ

を取り上げ、それらとジェントリフィケーションとの関係性を示唆する工夫が施されている。例えば東京都中央区における路線価の推移と土地利用の相関関係（第3章）は、主題図としても興味深く、バブル経済崩壊後の東京中心部の路線価低迷と、その後の集約的土地利用の発生要因との関係性が示されている。同時に本書では大都市（本書では「世界都市」）である京都、東京、ニューヨーク、ロンドン、ベルリン、大阪の中心部、すなわちインナーシティの構造に関する紹介もなされており、さらには全編に渡って地図・写真が多用されているため、都市地理学の専門家のみならず、それ以外の研究者や学生にも是非一読をお勧めしたい良書である。

本書の著者である藤塚吉浩氏（大阪市立大学）はジェントリフィケーション研究の専門家であり、本書でも様々な世界都市の紹介がされているが、その軸は一貫して「ジェントリフィケーション」に置かれている。そのため、都市に興味の少ない読者であれば躊躇しがちな世界「都市」を扱っている書籍の中でも、各国に関する詳細な背景知識や海外都市の個々の地理的名称に関する予備知識がなくとも内容が理解できるという側面も持っているといえよう。

末筆として今後、例えば本書でも取り上げられていた東アジア諸国（第3章）、旧社会主義国（第9章）の研究の発展も期待されるし、または近年、文化人類学分野などの隣接諸分野で進められつつあるアフリカ諸国等は、植民地経営の時代にアングロサクソンの都市開発の影響を少なからず受けた例であり、こうした最新の研究を含め、全世界におけるジェントリフィケーション研究の動向も待ち望まれるところである。

（池田真利子）

宮澤 仁編：『地図でみる日本の健康・医療・福祉』明石書店, 2017年3月刊, 204p., 3700円（税別）

本書の編著者である宮澤氏は「はじめに」で本書の特徴を簡潔に示している。すなわち、「日本の健康・医療・福祉に関する図解事典」であり、「地図」を中心に据えて事項を解説」していること、さらに「保健・医療・福祉の分野で相互の連携が重視されていること」を踏まえてこれらに関わる事項を網羅していることである。

本書の執筆者は編著者の宮澤氏を含め18名に及ぶが、彼らは保険・医療・福祉の各分野で実績のある研究者である。それぞれの研究者の有する研究課題は様々であり細分化されている部分もあるが、本書は、地図という共通の道具を用いたことで、保険・医療・福祉という非常に幅広いテーマを一つの軸で網羅し、共通性や個性を理解することを可能にしている。

さらに保険や医療を対象とした書籍であるが、執筆者が地理学の研究者であることも本書の重要な特徴である。この点について、宮澤氏は「おわりに」において「地域を多面的に把握すること、また、他地域との比較を通じて自地域を相対化すること」が肝要であり、そのために地理学的視点が重要であると説明している。本書には多数の地図が掲載されているが、それらから地域の特徴を把握し地域間の比較からその特徴を文章で説明するのは、地理学を学んだ者の得意とするところであり、本書では地図から何を読み取ることができるのか、丁寧な解説が付されている。さらに、カルトグラムや経路距離に基づくバッファー分析などの地理学的な分析を用いることで、より詳細な分析や考察も行っている。このように、地図を活用した考察や記述という点が、保険や医療に関する類書に比した際の本書の大きな特徴であり、地理を専門とする者が執筆した効果が発揮されてい